



東宝撮影所



## 自然の猛威の前には人間はかなわない

——ゴジラの映画を観させていただきました。監督された『ゴジラ×メカゴジラ G 消滅作戦』（2000年）『ゴジラ×メカゴジラ』（2002年）『ゴジラ×モスラ×メカゴジラ 東京SOS』（2003年）の3つのゴジラ作品のうち2は本闘う女性が主人公になっています。それは監督のお考えがあるのですか。

手塚——これまでゴジラというと、男ばかりが主人公でした。男の場合、自衛官であったり、警官だったなら、闘えといえれば仕事で闘えます。しかし、体力もない女の子がゴジラに向かって闘いを挑む。なぜ闘わなければならないのか、映画を観る方にも興味をもっていただけたらと思います。

——都心のビル群や、大規模な土木構造物が、ゴジラによって破壊されていく。それは、文明社会が

映画監督

# 手塚 昌明 氏

TEZUKA masaaki

もろいものであるとか、人間に対する警告というようなこともあるのでしょうか。

手塚——人間が一生懸命つくっても、バベルの塔と同じで、自然の前にはかなわないという思いが基本的にあります。人間は、自分の知識や技術で確かにすごいものをつくりまします。しかし、それが大地震など、自然の猛威の前で通用するのか。私は通用しないと思っていて、その象徴がゴジラでもあるのです。

よく「監督にとってゴジラって何ですか?」と聞かれるのですが、私は神様だと答えています。地震や雷などの自然の災害と思ってもらっても結構ですが、大きな意味での神様です。人間はゴジラが来た段階で、台風と同じように、黙って何もしないで通り過ぎるのを待つしかない。しかし、人間の生活圏に入った巨大な生物を、人間は倒そうとします。倒せるわけではないと思うのですが、それに向かって一生懸命闘う。人間は無駄な闘いだとはわかっていても、闘わなければならない。だから頑張る。私が撮ったゴジラ映画は、全部闘う人たちとか、守る人たちが主人公です。家族や社会を守るために自らの生命を賭して、一生懸命必死になって闘

う。だから、人間って崇高なのだという思いで撮っています。

## 東京大空襲と同じルートで上陸

——ゴジラは完全に倒すというところまでいきませんね。それはそういうふうになっているのですか。

手塚——私自身は倒してはいけないと思っています。そうすると、主人公たちが闘っている意味は何なのだということになるのですが、相手が強ければ強いほど一生懸命やらなければならない。しかし、やはり最終的には神様に盾突いてはいけないのではないのでしょうか。

——ゴジラはもともと核汚染から生まれたものですよ。

手塚——1954（昭和29）年にゴジラの1作目をつくったときは、生き残っていた恐竜が、水爆の実験で被爆して、核のエネ



ルギーで大きくなったという設定になっています。戦後9年目くらいのことです。

—たとえば、神戸の被災から10年ですが、今神戸をもう一度破壊するといったら、やっとな復興したのということになると思うのですが、本当の戦災でメチャクチャになってしまったところに、そんな映画をつくった。当時としてはインパクトがあったでしょうね。

手塚—戦争というのは本当に悲惨な出来事で、人が何百万人も死にます。ゴジラもまさにその戦争の恐怖と同じなのです。1作目は東京大空襲と同じルートを踏襲し、ゴジラも品川から上陸し、都心部へ向かっていきます。そして、ゴジラを見る視線は陸地から海に向けられています。あくまでもアメリカのほうを向いているのです。空爆されてそれを受けたのは日本人だということで、日本人の視線でゴジラを見ています。当時見た人たちはとてもリアルだったと思いますね。

## 品川は倉庫街で、 ちょうど上陸し やすい

—ゴジラの映画は何年か間隔をあけて、忘れた頃にまた製作されます。地震や台風の災害でも、前

の惨事を忘れた頃にやってきて、人間に警鐘を鳴らす。そういう意味深なとらえ方もできます。

手塚—リアルに言うと、ゴジラは予算が掛かりますので、毎年つくり続けるというわけにはいきません。それで準備期間を置いて取り掛かるというところがあるのです。

—品川から上陸という設定は、第1作に対しての対比的なものがあるのでしょうか。

手塚—東京湾を越えて速く都心に行くためには、羽田から上陸ではちょっと遠いし、それを越えて内陸まで入ってしまうと、ビルが建ってきてしまう。品川は倉庫街で、ちょうど上陸しやすい。ゴジラも意味もなく

ビルを壊しているわけではなくて、本当は避けられればいいのですが、面倒くさいので突っ切ってしまう。『ゴジラ×メガギラス』で、幹線道路をなんでゴジラが歩くのですかと言われました。それは突き当たりにビルがあれば、それを突破していきませんが、ゴジラにとってもビルを壊すのは痛いですから、何もないうところを歩くほうがラクだからです。

## 現場で心がけているのは怒鳴らないこと

—映画監督と土木の現場監督は、人をまとめたり、スタッフに良い仕事をしてもらったりと、マネジメントで共通点があると思うので



©2003 TOHO 「ゴジラ×モスラ×メガゴジラ 東京SOS」





すが、留意されている点をお聞かせください。

手塚——「監督」「監督」と言われますけど、私は現場監督だからとよく言うんです。現場で偉そうにふんぞり返っている監督もいます。何を聞いても答えてくれない。それは何も考えていないということで、言いたくても言えないのです。そして、次の日、現場で無理なことを言い出す。でもそれは時間の無駄です。

私はある程度、予算を守り、

スケジュールを守って、スタッフに怪我がないようにし、そして、難しいですが、でき上がった映画を見て、スタッフみんなにやってよかったなと思ってもらいたいと思います。

たとえば、最新作の『戦国自衛隊 1549』は、本当に大変でした。台風は来るし、お金もないし、時間もない。自衛隊が来る日は決まっていますから、それをみ出すことはできない。振り向くと、戦車と装甲車が10台ぐらいいて、騎馬武者が

50～60騎、その後ろに雑兵が500人くらいいると、もう四の五の言っていられない。少なくとも撮らなければならないし、その日のスケジュールはこなさなければならない。そのために、私は全部絵コンテを描いて、スタッフの誰もが明日は何を撮るのか、全部わかるようにしています。それはある意味では手の内を見せることにもなりますが、それも覚悟のうえでした。そうすれば、スタッフが1つの撮影の間に、次に何をしなければならぬか、自分で考えることができ、効率よく撮影ができます。

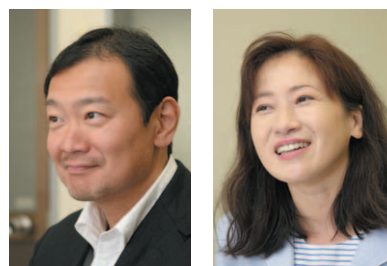
そして、現場で何よりも心がけているのは、怒鳴らないということです。怒鳴ると現場も締まって、俳優さんも緊張するし、他のスタッフもピンと緊張の糸が張りますが、決して良い仕事ができるとは思えません。ですから、できるだけ笑顔を絶やさないということを心がけています。

——一番難しいのが、天候ですか。

手塚——そうですね。『戦国…』では、2004年の9月から11月まで撮影をしていましたが、大型台風が3回も直撃しました。それでも本格的なセットをつかったので、無事撮影を済ますこ

## インタビュー

会誌編集委員  
松岡孝哉(左)・紙田和代(右)



とができました。現場では安全にも気を使います。特に照明など、徹夜続きになると、呼ばれたときにうたた寝をしていて、ふと立ち上がったら足場がなく、そのまま落ちてしまうということも起きます。特に今の『戦国…』では、出てくる兵器が並みではありません。自衛隊のほうにも怪我があってはいけませんし、何かあった場合には製作が中止になってしまいますので、気を使いました。

### あきらめないで最後まで頑張る

——ゴジラの映画では特生自衛隊(対特殊生物自衛隊)が、ゴジラに向かって、あきらめずに闘ってい

ますよね。土木のエンジニアというのも、台風だとか、地震だとか、自然にある面、立ち向かっているわけです。最後に、そういう土木エンジニアに応援のメッセージをいただけませんか？

手塚——自分ではあきらめてはならないと常に思っていますし、自分がやってきたことを続けなければならないと思っています。前向きに一步でも二歩でも進んでおかないと、明日は来ない。つらくてもその場を逃げないで、少しでも前進していれば、次の日も絶対太陽は昇ってくるし、自分にとって良いことがある。だから、途中で絶対あきらめて投げてはならないと、常に思っていますし、自分でもそういうキャラクターが出る映

画を、『ゴジラ…』でも『戦国…』でもつくっています。うちには中学生と高校生の子供がいるのですが、その子たちにもいつもそう言い続けています。

私は、幼稚園の子が観ても、80歳のお年寄りの方が観ても、全然嫌な思いがしない。そして、映画のなかでもあんなに頑張っていたから、自分もちょっと頑張るかなって、映画館を出たときに後ろから10cmくらいポンと背中を押せる。そんな良質のエンターテイメント作品をいつもつくりたいと思っています。

『戦国…』では、嶋大輔さんが演じる自衛隊の曹長がいます。私と同じ中間管理職で、子供2人と、きれいな奥さんがいて、煙草くさいからやめればといわれるのですが、子供からももらったライターを大切にしていて、うちではうだつが上がらなくても、闘うときは家族を守るために闘っている。そういう思いで、キャラクターをつくりました。うちではいろいろ言われているお父さんも、現場へ行けば頑張っていて、家族を守るために一生懸命やっている。そういう思いを伝えなかったのです。

——最新作の『戦国自衛隊 1549』を楽しみにしています。今日はありがとうございました。

